



石清水八幡宮の境内

古文書から見た 戦国合戦

～私部城を巡る攻防～



安見新七郎と私部のその後

第7回は、私部城最後の城主について紹介します。

問い合わせ 社会教育課文化財係 (TEL 893・8111)

最後の城主、安見新七郎

安見右近の死後、私部城主となったのが安見新七郎という人物です。右近との詳しい関係は分かっていますが、5月号で紹介したとおり、右近の死後すぐに起きた松永久秀たちによる私部城攻めから城を守りぬく力量の持ち主で、右近の片腕的存在であったと思われる。

新七郎が私部城主になったのは、右近の息子が成人するまでの代理と考えられますが、実質的には最後の城主となりました。

新七郎の活躍

新七郎は、天正4年(1576)当時から大きな神社であった石清水八幡宮と、星田の土地を巡って争ったり(『石清水文書』)、天正7年、織田信長の家臣から枚方の鋳物師(主に生活用具を製造する職人)に課せられた労働のことで相談を受けていました(『真継家文書』)。

新七郎が、石清水八幡宮に対抗できる力を持っていたことや、枚方を含めた広域に及ぶ影響力があったことが分かります。

また、『原本信長記』などの記載では、天正6年、信長が新七郎の所へ立ち寄り休息をとっています。天下統一を目前に、様々な勢力から命を狙われる中でのことであり、信頼されていたことが伺えます。



『真継家文書』(名古屋大学所蔵)

天正9年には、信長が京都で正親町天皇を招いて行った馬揃え当時の大規模軍事パレードに、河内の取次者として招集されています。このことから、新七郎が有力領主として扱われていたことが分かります。



『原本信長記』(国立公文書館蔵)

私部城の終わり

新七郎が様々な活躍をしていましたが、私部城は信長が河内を平定した後、その役割を終えたと考えられています。信長の死後、時代が変わる中で、安見氏も交野から他の土地に移っていったようですが、その経緯はまだよく分かっていません。今後の調査で明らかにしたいと思っています。

今月までは、戦国時代の古文書などから、私部城の「実像」を紹介してきました。次回からは、主に戦国時代の古文書を通して、私部城が人々にどう「記憶」されていたのかを紹介します。

交野と石清水八幡宮

平安時代ごろから、交野市の大半は、石清水八幡宮の荘園でした。今は石清水祭、昔は放生会と呼ばれる祭には、「神人」と呼ばれる神社に奉仕する人が参加していますが、現在も交野では、私市地区の人が行列の先陣をとる「御前払神人」、森地区の人が提灯を掲げる「火長神人」として祭に参加しています。

いwashimizuはちまんぐうほうじょうええまき
石清水八幡宮放生会絵巻(交野市指定文化財)



火長陣衆

御前払神人

コラム

